

# 次代へ紡ぐ緞通の歴史

## 赤穂緞通 弥生工房

**基本データ** 平成14年から「弥生工房」を構える。令和2年には新たにギャラリー工房を作り、見学や体験ワークショップの受け入れも行っている（要予約）。

**連絡先** 住所：赤穂市古浜町119（赤穂緞通 弥生工房）  
TEL：0791-45-0025



赤穂緞通作家の根来節子さん

### 要点

- 赤穂緞通の歴史は、江戸時代にまで遡る
- 一時は技術継承が危ぶまれるも、市教委主宰の講習会で歴史が繋がる
- 根来さんは、地産地消で付加価値の高い商品開発に取り組む

### 一 赤穂緞通とは

江戸後期、中村（現赤穂市中広）で暮らしていた児島なかが、高松で出会った中国緞通に魅せられ、これを赤穂で作って商品化したいと、30年かけて独自の技法を完成させたのが赤穂緞通の始まりです。亀甲、福寿、蟹牡丹、鳳凰など、邪気を払う瑞祥紋様が多く、京の茶人、名高い料亭、豪商に好まれた。天皇の御召列車や枢密院の玉座にも天蚕を使用した赤穂緞通が採用された。

### 一 具体的な活動と今後の展望は

大正時代隆盛を極め、昭和12年頃綿花輸入制限により緞通場が閉鎖。戦後再開するが高度成長で機械化に向かない手作業の織元は廃業。平成3年には緞通場は1軒になりました。そこで、赤穂市教育委員会が主宰、技術伝承者の阪口キリエさんを講師として「赤穂緞通織方技法講習会」を開講。根来節子さんは、受講した20数名の女性の一人。「赤穂緞通を多くの人に知ってもらいたい」と話す根来さんは、若手を育てながら更なる飛躍のため、赤穂を中心とした「無農薬綿花栽培」、赤穂コットンを草木染し安心した糸で、地産地消の付加価値の高い商品開発に取り組む。



100年ほど前に制作された古い赤穂緞通を展示



工房の様子。この織機で赤穂緞通を作る

### 感想

伝統工芸品『赤穂緞通』の歴史についての説明を受けた後、織り方の体験をさせていただきました。赤穂緞通の制作は、全て手作業で織細・根気のいる作業で驚きました。大きい作品だと畳一畳位の大きさと制作が数か月続くとのことでした。取材時、展示作品を見学し斬新な模様と温もり感到に感動しました。